筑波大学　先史学・考古学研究　第28号　51-66　2017

研究ノート

5～6世紀の現スロヴェニア地方におけるゲルマン系戦士の副葬品
― クラニ・ラユフ墓地を中心に ―

ブライフリバル久保・ペトラ

先史時代から現在まで，重要な貿易や交通の動脈は現スロヴェニア地方を横断した。民族移動時代にも重要な役割を果たし，イタリアへ通ずる道路を制御することが非常に重要であった。ゲルマン系の部族は同地方で戦略上最も重要な道路を掌握していたが，これまでに出土したゲルマン系の遺物は非常に少ない。本稿では，現スロヴェニア地方におけるゲルマン系の埋葬遺跡および武器の問題を取りあげる。被葬者および副葬品は，古代社会の構造や生活のあり方などの様々な情報をもたらすと考えられるからである。具体的には，現スロヴェニア地方におけるゲルマン系（東ゴート族およびランゴバルド人を中心に）の歴史を略述した上で，ランゴバルド人の社会をめぐる従来の考古学的研究成果に立脚しつつ，当時のもっとも重要な墓地および要塞とみられているクラニ遺跡における戦士の墓について検討する。

ゲルマン系の埋葬に伴う武器の配置には一定のパターンがある。最も優位に立つ武器はスパタであり，被葬者の右側に置かれている。ドラヴリェ（Dravlje）19号墓の被葬者には，左腕の下にサックスが副葬され，パンノニアのセントエンドレ（Szentendre）遺跡とヴォルシュ・カユダッシュ（Vörs-Kajdacs）遺跡と同様な性格を示している。ただし，それらの被葬者には左側に武器が副葬されていた。

現スロヴェニア地方に位置するクラニ・ラユフ（Kranj-Lajh）墓地とソルカン（Solkan）墓地では，武器が被葬者の右側に集中している。スパタがない場合には，サックスが代わりに副葬されていたと考えられる。イシュトヴァン・ボナ（Istvan Bona）の研究を参照すると，ランゴバルド人の貴族は甲冑を含む武器セットとともに埋葬されていたようである。甲冑を含む武器セットの副葬は現スロヴェニア地方には認められないが，クラニ・ラユフ墓地6号墓の被葬者は地位が高い貴族であり，甲冑とともに埋葬された可能性もある。

Ⅰ．はじめに

現スロヴェニア地方は，戦略的に「世界・文化の境界領域」[1]に位置していると考えられる。先史時代から現在まで，重要な貿易や交通の動脈は現スロヴェニア地方を横断しており，同地方は民族移動時代にも重要な役割を果たした。この変動期には，イタリアへ通ずる道路を制御することが非常に重要であり，ゲルマン系の部族はローマ人と同じように，現スロヴェニア地方で最も戦略上重要な場所および道路を掌握していた。現スロヴェニア地方の道路は，当初は重要な幹線道路であったが，ゲルマン系の部族がイタリアに移動してからは，イタリアへ通ずる道路を守るべき戦略的な場所に変わったと考えられるため，同地方の遺跡からは数多くのゲルマン系の武器が出土する可能性がある。しかしながら，文献史学の成果によりそうした状況が想定されるとしても，これまでに出土したゲルマン系の遺物は非常に少なく，その最大の原因は発掘調査の不足であると考えられる。また，同地方で発見された民族移動時代の遺跡では，墓地と集落がともに発見されているものは少ない。さらに，発掘調査が行

われた遺跡の詳細は，現在までにいずれも公表されていない。

本稿では，現スロヴェニア地方におけるゲルマン系の埋葬遺跡および武器の問題を取りあげる。埋葬遺跡における人骨および副葬品は，古代社会の構造や生活のあり方，死生観などの様々な情報を得る上でもっとも有用な遺物であると考えられるからである。

具体的には，当時のもっとも重要な墓地および要塞とみられているクラニ遺跡[2)]を紹介しながら，墓地に埋葬されていたランゴバルド人戦士の副葬品について検討することにしたい。

以下ではまず，現スロヴェニア地方に関わりの深いゲルマン系民族であるゴート族とランゴバルド人の歴史を，主に文献史学の成果にもとづいて略述する。その後，ランゴバルド人の社会をめぐる従来の考古学的成果をふまえつつ，クラニ・ラユフ墓地における戦士の墓について若干の検討を試みてみたい。

Ⅱ．ゴート族史

ゲルマン系民族に属するゴート族は，北欧を出たのち，まず現ポーランドのバルト海海岸部に移住し，次に黒海海岸部に移動したことが知られている（Šmit 2006：p. 7）。

この時期の社会状況を知る上で，もっとも重要な文献資料はヨルダネス（Jordanes）（東ゴート族の学者）による『ゴート人の事跡』（*De origine actibusque Getarum, Getica*）である。ヨルダネスは，ゴート族の伝説的な起源から，540 年に殺されたヴィチギス王までの部族の歴史を描いている（Šmit 2006：p. 7）。

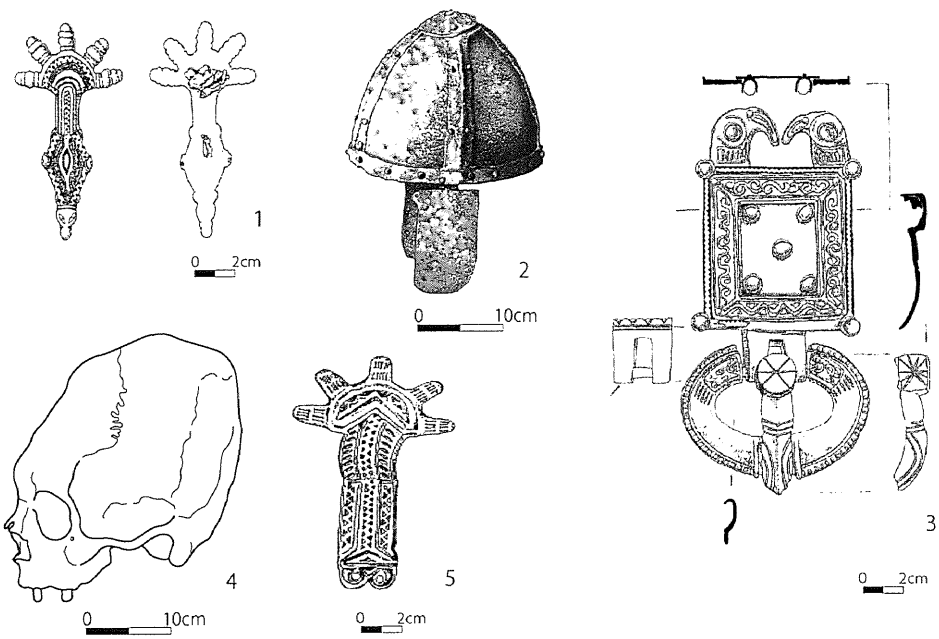
ヨルダネスによれば，ゴート族は海を渡り，北欧から北ドイツ，ポーランドに移動し，黒海海岸部まで進んでいたようである。その証拠として，考古学的な遺物は北海からも出土している。現在の北ポーランドの遺物は，ヴィエルバルク（Wielbark）文化のものと考えられる。黒海海岸部で栄えていた文化は，シンタンニャ・デ・ムレッシュウ（Sîntana de Mureş）文化（現在のウクライナ，ルーマニア，モルドヴァ，ベラルーシ）と呼ばれている。ヴィエルバルク文化よりも貴重な材料を使用していたことが知られ，ボスポロス王国の影響を受けて，金，銀および宝石を使用するようになったとみられている（Giese 2004：pp. 11-15）。

375 年には，フン族の移動によりゴート族がイタリアに入った。ゴート族はメジア（Mezia）（現在のセルビア）に入り，コンスタンチノープル（Constantinopel）へ進んだ。そして，378 年にはアドリアノプル（Adrianopel）でローマ軍と戦った。さらに，410 年にはアラリフ（Alarih）王に支配されていたゴート族がイタリアのローマを略奪したのち，ローマからガリア（Galia），スペインへと移動し，トレド王国を樹立した（Šmit 2006：p. 8）。その後，トレド王国は 711 年にアラブ人による支配に組み込まれた。

ゴート族の一派である東ゴート族は，453 年にフン族のアッティラ（Atila）王が死亡したのち，パンノニア（Pannonia）から西に向かい，455 年にはバラトン湖の周辺に移動した。471 ～ 472 年には，パンノニアからバルカン半島に移動し，コンスタンチノープルに向かうが，途中でイタリアに目的地を変更した。そして，488 ～ 489 年には，現スロヴェニア地方に居住していたと考えられる。その後，ソチャ（Soča）川での戦いを経てイタリアへと進んだ（Giese 2004：p. 34）。493 年 2 月に，ラヴェンナ（Ravenna）において東ゴート族のテオドリック（Theodericus）とオドアケル（Odoaker）は共同統治を始めたが，10 日後にオドアケルがテ

オデリックに殺された。このラヴェンナ（王国の首都）には，サンタポリナーレ・ヌオヴォ聖堂，テオドリック廟など，東ゴート族の時代の最も重要な建物が存在する。そして，552年に東ゴート族はユスティニアヌス1世（Iustinianus I）との戦いに敗れ，同年の10月に最後の東ゴート族の王がヴェスヴィオ（Vesuvio）で殺された（Giese 2004：p. 52）。

現スロヴェニア地方から出土している東ゴート族の遺物は，イタリア（ラヴェンナ）王国から552年までの間のものである。イタリア王国に特徴的な遺物は，5つの枝角の留め針（フィブラ；第1図1），バルデンハイム型のヘルメット（ビザンチウムの影響；第1図2）および宝石と金の小物（主に装身具；第1図3）である。ドラヴリェ墓地では東ゴート族の被葬者が埋葬されており，その特徴として頭骨の変形が（第1図4）認められる（フン族の影響）。同墓地では，リュブリャーナ・ドラヴリェタイプの留め針（フィブラ；第1図5）が出土している。東ゴート族のもとみられる墓地は，2012年に発見されたヴィパヴスカ・ドリナ（Vipavska Dolina）のミレヌ（Miren）である（男性3人，女性4人）[3]。リフニク（Rifnik）では，青銅製の5つの枝角の留め針（フィブラ）およびゴート族の古銭が出土し，東ゴート族のものとみられる遺物がジダニ・ガベル（Zidani Gaber），グラデツ・プリ・ヴェリキ・ストルミツィ（Gradec pri Veliki Strmici）等から出土している。



第1図　東ゴート族およびランゴバルド人の装身具と武器
1：東ゴート族の5つの枝角をもつ留め針（フィブラ）；クラニ・ラユフ墓地，スロヴェニア
2：バルデンハイム型のヘルメット；シンユ遺跡，クロアチア
3：東ゴート族の宝石（アルマンディン）を用いた金の鷲型締め金具（ベルト）；クラニ・ラユフ墓地，スロヴェニア
4：東ゴート族における頭骨の変形
5：リュブリャーナ・ドラヴリェタイプの留め針（フィブラ）；ドラヴリェ墓地，スロヴェニア

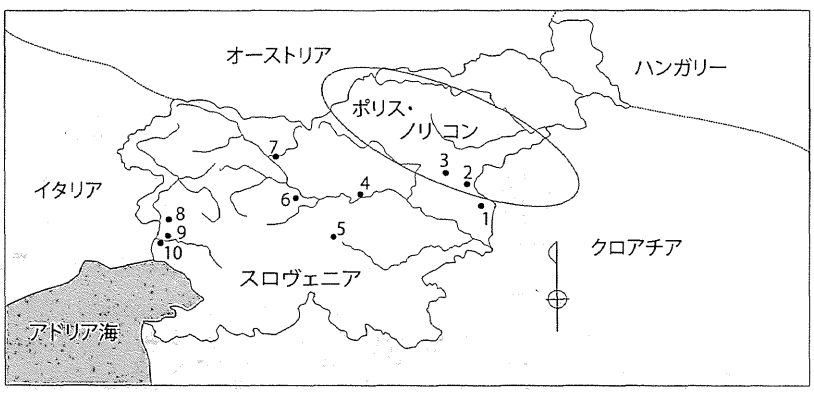
Ⅲ．ランゴバルド人史

747年に成立した『ランゴバルド人史』(*Historia gentis Langobardorum*) によると，ランゴバルド人の旧名はウィンニリ (Winnili) 族といい，南スカンディナヴィア半島に居在していた。パウルス・ディアコヌス (Paulus Diacunus) はランゴバルド人の名前が彼らの長い髭との関係があると指摘しているが，現在の学者はオーディン (北欧神話の主神) の信仰に繋がっていると考えている (Priester 2004)。2世紀半ば頃にはランゴバルド人がラインラント (プファルツ州) に入り，マルコマンニ戦争の直前にパンノニアで略奪し，4世紀 (390年頃) にモラヴィアに入り，425年頃にスロヴァキア地域に移動した (Menghin 1985：pp. 15-16)。

453年になると，フン族の王・アッティラが死亡したので，5世紀の80年代には東ゴート族がイタリアに移動し，ランゴバルド人はパンノニアに入った。その後，6世紀の40年代には徐々にパンノニアの中心に移動し，546～547年には，ユスティニアヌス1世 (東ローマ帝国の皇帝) がパンノニアにあるポリス・ノリコン (Polis Norikón) という地域を彼らに与えた (第2図)。ポリス・ノリコンは，おそらく現代のドナウ川からさらに南オーストリアおよびサワ (Sava) 川までのスロヴェニアにあたる地域であると考えられる (Ciglenečki 1992：p. 3)。

565年にユスティニアヌス1世が死亡すると，ランゴバルド人はアルボイーノ王の時代 (568年4月・復活祭の翌日) にイタリアに移動した。まずは，チヴィダーレ・デル・フリウーリ (Cividale del Friuli) に公爵領を設けたが，571年にはイタリア王国を樹立し，パヴィアを首都とした。最終的には，773年からのフランク人との戦争に敗北し，774年にランゴバルド王国は滅亡した。782年にカール大帝がランゴバルド人に支配されていた地域の全てをローマ司教に与えた。

以上のような移動の中で，4世紀初頭以降，ランゴバルド人をはじめとする様々なゲルマン系の部族がローマ帝国の軍隊に加わることになったと考えられている (Lotter et al. 2005)。



第2図　現スロヴェニアにおけるゲルマン系遺跡の分布およびポリス・ノリコンの位置
1：スヴェテ・ゴレ・ナド・ビストリツォ　2：ティヌイェ・ナド・ルコ・プリ・ジュスム
3：リフニク　4：スヴェタ・ゴラ・ヴ・ザサヴユ　5：リムベルク　6：ドラヴリェ　7：クラニ
8：ソルカン　9：ビルイェ　10：ミレヌ

Ⅳ．ランゴバルド人の階層社会

従来の研究では，640年に成立した『ロターリ宣言』(*Edictum Rothari*)，747年に成立した『ランゴバルド人史』および考古資料などを用いて，ランゴバルド人の階層社会を復元する試みがなされてきた。

初期国家形成期にあたる時期は，パンノニア期（510年～546/568年），スロヴェニア期（535年～568年以降），イタリア期（568年～774年）に区分され，イシュトヴァン・ボナ（Istvan Bona）とティヴァダル・ヴィダ（Tivadar Vida）は，副葬品の組成を手がかりとしてランゴバルド人社会の階層を以下のように復元している（Bona 1971，Vida 2008）。

王（rex）：パンノニア期における王墓はまだ発見されていない。

伯爵（dux）：武器（金製，銀製，めっき，象嵌），馬具（金製，銀製，めっき，象嵌），宝器（骨製・金製・銀製）などが副葬される。

貴族（adalingi および adalinga）：武器・馬具（金製，銀製，象嵌），締め金具（ベルト），ガラス製品，装身具，ガラス玉や琥珀玉，骨製の宝器，おもちゃなどが副葬される。墓穴は深くて広く（深さ4.5m，大きさ2×3m程度），石に覆われている。埋葬施設の上には馬の埋葬がよく認められる。

部族長（arimanni あるいは barones）：男性には武器（甲冑，象嵌の刀，銀製やめっきの留め針，フィブラなど）が副葬され，女性（arimanne）には豊かな装身具が副葬されている。

半自由人（aldiones）：男性には槍と鉄鏃が副葬され，女性（aldiae）には簡単な装身具（留め針と首飾り）が副葬される。

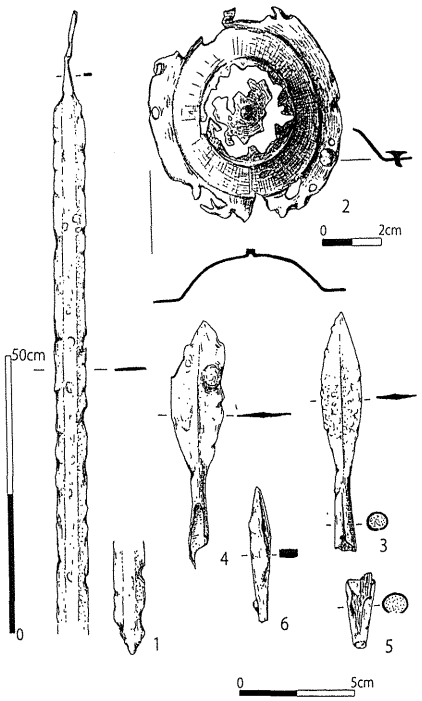
奴隷（servi）：以上の埋葬とは離れた場所に，副葬品なしで埋葬される。

以上の階層的理解とは別に，ランゴバルド人の女性（子供を含む）には，全員ガラス玉と琥珀玉，刀子（ナイフ），S型あるいは円型の留め針（配置は首の下あるいは胸）が副葬され，男性には，革袋（腰左側の後ろ）におさめられた火口，刀子，ハサミなどが副葬されるという特徴が指摘されている（Vida 2008：pp. 81-82）。

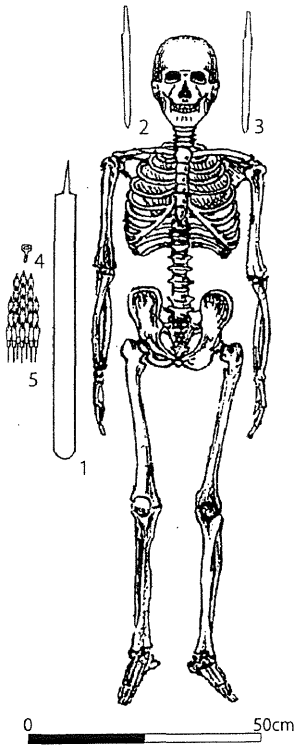
貴族（adalingi）に伴う基本的な武器は，90～100cmのスパタ（両刃の剣，第3図1，第6図2）であったとみられる。サックス（第4図1，第5図2・3）はパンノニア期におけるランゴバルド人の副葬品ではなかったので，サックスの代わりに刀子（第4図4・5）が副葬されたようである。また，槍（長さ2m，第3図5，第6図1）および甲冑（フランク型；第3図2）も一般的に副葬された武器であったとみられる。

こうした男性と武器副葬の関係は，新しく発見されたソゾラド（Szolad）[4]と呼ばれる遺跡（墓地）に典型的に認められ，同遺跡では武器を伴わない男性の埋葬は確認されていない。すなわち，25％の男性はスパタとともに埋葬され，残りの全てに槍が副葬されている（Vida 2008：p. 82）。

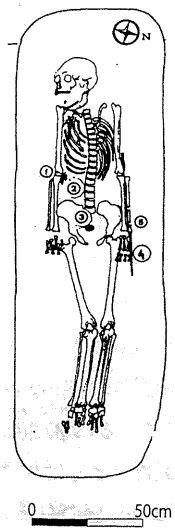
以上のような副葬品の配置についてみると，パンノニア期には，武器，とくにスパタや剣，刀子などが常に左腕の下あるいは左側の腰に置かれている。また，槍先は頭の右側（ヴォルシュ・カユダッシュ遺跡[5]，Vörs-Kajdacs，第6図）あるいは右足（セントエンドレ遺跡[6]，Szentendre）に配置されている。なお，パンノニア期の埋葬において鉄鏃が出土した事例はない。

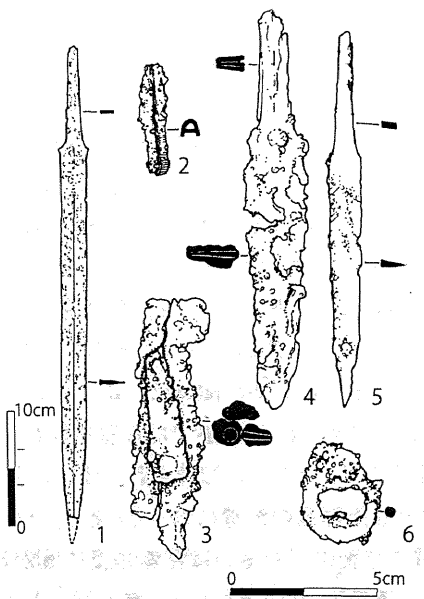


第3図　クラニ・ラユフ墓地6号墓（♂）出土の副葬品（一部）
1：スパタ　2：アンブー（盾）　3・4：鉄鏃　5：槍
6：鉄製品

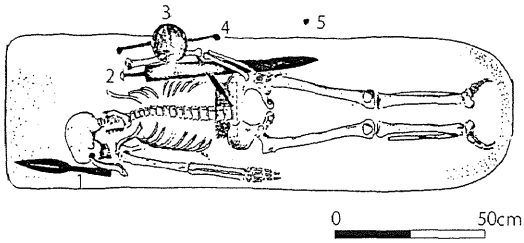


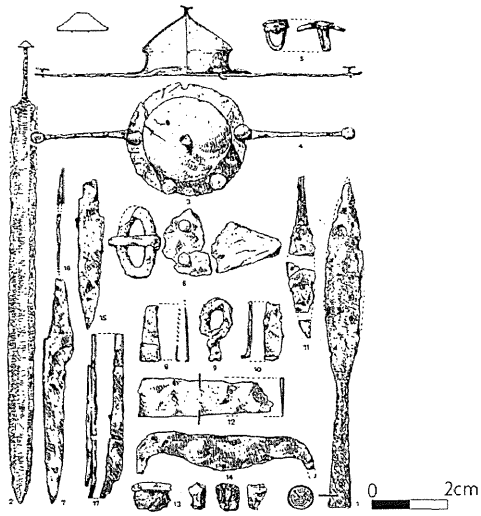
第5図　クラニ・ラユフ墓地Pečnik2号墓（♂）
1：スパタ　2・3：サックス
4：四角型締め金具（ベルト）　5：鉄鏃





第4図　ドラヴリェ墓地19号墓（♂）
1：サックス　2・3：鉄製品　4・5：刀子　6：卵円型締め金具（ベルト）





第6図　カユダッシュウ遺跡31号墓（♂）
1：槍先　2：スパタ　3：アンブー（盾）　4：刀子
5：鉄製品

つづくスロヴェニア期には，スパタと刀子が被葬者の右側に位置し，スパタが伴わない場合にはサックスあるいは刀子が副葬されていたとみられる。この時期には貴族の埋葬に伴って鉄鏃（第3図3・4）が出土している。

イタリア期における副葬品の種類および位置はスロヴェニア期と変わらないようである。ただし，キリスト教の影響で副葬品の数が減り，キリスト教に関わる遺物が副葬されるようになる。

V．現スロヴェニア地方におけるゲルマン系の遺物（武器）

パンノニア期にあたる6世紀は，異なる古ゲルマン系，先住民のローマ人，チューリンゲン，東西ゲルマン系の混在が認められる。ランゴバルド人のものとみられる遺物は，彼らがイタリアにおいて繁栄させるに至った文化の起源を示すものと考えられる。したがって，パンノニア期はランゴバルド人の歴史の中の単なる一時期ではなく，パイオニアの段階として再評価されるべきである。

ボナによれば，ランゴバルド人の貴族は，スパタや甲冑，盾などから構成される「武器セット」とともに埋葬されている。クラニ・ラユフ墓地6号墓を除き，現スロヴェニア地方ではこのような埋葬がまだ発見されていない。一方，現スロヴェニア地方のゲルマン系の墓地には，スパタと鉄鏃の組み合わせが存在するが，パンノニアには知られていない。現スロヴェニア地方で発掘された埋葬に伴う鉄鏃はスパタの近くで発見され，右側への配置が認められる（Bona 1971）。

クラニ・ラユフ墓地Pečnik2号墓（第5図）は，被葬者の頭の右左に配置されたサックス以外に数多くの鉄鏃（23点）が出土しており，特別な埋葬とみられている。スパタと2点のサックスから判断すると，被葬者は貴族であり，弓を好んで武器として使っていたのかもしれない。また，別のグループの代表者であり，例えば射手だった可能性も考えられる。

ソルカンの墓地で出土した武器は被葬者の右側に置かれていた。ただし，12号墓は特別であり，サックスは被葬者の膝の上から出土し，サックスの下からは小さな刀子が出土している。また，18号墓では，埋葬されていた被葬者の右腕の下からスパタが出土し，左腕の下からは小さな鉄製の刀子，頭の近くからは石の刃が出土している。しかしながら，これらは，

6 世紀後半から 7 世紀初頭のものである。

ドラヴリェ 19 号墓（第 4 図）では，被葬者の左腕下からサックスが出土している。左腕下の配置はセントエンドレ遺跡とカユダッシュ遺跡に似ている。しかしながら，19 号墓の被葬者はランゴバルド人ではなかったと考えられる。また，ドラヴリェは東ゴート族の墓地とみられるものの，東ゴート族は墓に武器を副葬していなかったと考えられるため（Slabe 1975：p. 73），19 号墓の戦士は東ゴート族ではないと判断できる。副葬品の特徴から判断すると，この墓の被葬者は東ゴート族とともに居住していたアラマンニ（Alamanni）族ではないかと考えられる。

上記のように，現スロヴェニア地方では，ランゴバルド人や東ゴート族のものではないゲルマン系の存在を示す考古学的証拠があり，ほかにもリムベルク（Limberk）出土の剣（サアルマト・アラン族の影響を示す）やスヴェテ・ゴレ・ナド・ビストリツォ（Svete Gore nad Bistrico）の火葬墓（火葬された被葬者はおそらくルギー（Rugii）族）などがある。それらは，ランゴバルド人および東ゴート族だけでなく，フランク族，ゲピッド（Gepidae）族，アラン（Alani）族，アラマンニ族，ヘルリ（Heruli）族およびトゥリンギー（Turingi）族の存在を示している。

現スロヴェニア地方では，最古のランゴバルド人の遺物がもっとも東側の地域で出土している。それは，ユスティニアヌス 1 世に与えられたポリス・ノリコンと呼ばれる地域である。代表的な遺跡として，リフニク，ティヌイェ・ナド・ルコ・プリ・ジュスム（Tinje nad Loko pri Žusmu），スヴェタ・ゴラ・ヴ・ザサヴユ（Sveta gora v Zasavju），スヴェテ・ゴレ・ナド・ビストリツォがあげられ，いずれもパンノニア期に属している。次の段階の遺跡は，現スロヴェニア地方のもっとも西側の地域に位置し，イタリア（ビルイェおよびソルカン）の近くにある。それらの中には 6 世紀末および 7 世紀末の遺物もあり，イタリアへのランゴバルド人の移動時期（568 年の復活祭の日）に対応している。

現スロヴェニア地方でもっとも重要な要塞はクラニ遺跡にあったとみられ，東ゴート族もランゴバルド人も，イタリアに移動してからクラニ遺跡の要塞を支配していたようである。民族移動時代におけるヨーロッパ最大の墓地（3,000 基以上）であるクラニ・ラユフ墓地は，当時の様々な部族が共存していたことを示している。数々のゲルマン系の遺物は異なる部族の存在を示し，先住民であるローマ人のものとみられる遺物も数多く出土している。ただし，先住民であるローマ人の墓地は，ゲルマン系の埋葬地点とは離れた場所に営まれている。

現スロヴェニア地方では，東ゴート族の墓地が 2 カ所で確認できる。ドラヴリェでは 35 基の墓が検出され，被葬者の頭骨はゴート族における伝統的な変形を示している。2012 年に発見された墓地は，ヴィパヴスカ・ドリナのミレヌにある。これら東ゴート族の墓地からは，男性 3 人，女性 4 人の埋葬が確認されている。

Ⅵ. クラニ・ラユフ墓地

1. クラニ・ラユフ墓地の概要

クラニ市は，リュブリャーナ市から北西に 30 km 離れた場所に位置している（第 2 図 7）。148 km^2 の面積および 37,586 人（2016 年）の人口をもつ都市は，中世初期にクラニスカ地方（Kranjska，現在のゴレンスカ地方）の首都であった。

クラニ・ラユフ墓地は，現都市の南南西に位置し，サワ川の左岸，コクラ（Kokra）川の河

口の近くに広がっている。墓地は河口と急峻な南山麓の境目に位置している。現在は街区となっているもっとも急峻な南山麓には，カリニウム（Carnium）と呼ばれるローマ時代と民族移動時代の要塞の跡がある（Vinski 1980：p. 17）。カリニウムは，6世紀に栄えたサヴィア州（Savia）のもっとも西部に位置していた。

クラニ・ラユフ墓地は，5世紀末から7世紀初頭まで使用されていたと考えられる（Vinski 1980：pp. 17-20）。また，7世紀後半に使用されたランゴバルド人の古銭も出土しているため，7世紀初頭以降の埋葬も存在する可能性が高い（Pleterski 1999：p. 395）。

クラニ・ラユフ墓地では，1898年のトマジュ・パヴシュラル（Tomaž Pavšlar）による発掘調査に始まり，今日に至るまで調査が続けられている。最初はゲルマン系のみの墓地とみられていたが，1960年代には，先住ローマ人の墓もあることが判明した（Werner 1962：pp. 126-127）。6世紀初頭頃における東ゴート族および6世紀後半のランゴバルド人に支配されていた先住ローマ人の墓が数多く検出された一方で，東ゴート族の存在を示す遺物の出土は少数で（Knific 2005：p. 331），そこでは男性の墓への武器の副葬は認められなかった。クラニ・ラユフ墓地では，これまでに3,000基以上の墓が検出されているが，そのうち調査内容が報告されているものは647基である。それら既報告の資料は，1989年から1905年の間に行われた発掘調査によるものであり（Stare 1980：p. 8），出土した遺物と人骨は，スロヴェニア国立博物館（Narodni muzej）とウィーン自然史博物館（Naturhistorisches Museum）に保管されている。また，それら647基の中で副葬品が確認されているのは285基である。

カリニウムと呼ばれていた要塞は，500～540年に東ゴート族に支配されていたが，東ゴート族のものとみられる墓は少なく，その一方で，ゲピッド族のものとみられる墓が存在する。その後，540～546年には東ローマ帝国に支配されていたが，546～548年にはランゴバルド人がカリニウムに移住し，568年以降に要塞を支配した。この要塞では，50年以上クラニに滞在していたランゴバルド人の6世紀後半における墓が数多く検出されている。また，アラマン族のものとみられる遺物も認められるが，彼らの存在はサヴィア州のメロヴィング朝との関係をうかがわせる。540～552年にテウデベルト1世（Theudebert）とその息子テオデバルド（Theodebald）は北イタリアを出て，コロシュカ・アルプス（Koroška）に遠征をした際，当時彼らに支配されていたアラマン族もこの遠征に参加していた。アラマン族の存在は，歴史学的にも考古学的にも，6世紀後半のヴェネチア（Venetia）において認められている（Vinski 1980：p. 19）。このほか，フランク族の武器も出土しているため，フランク族に属していた部族もクラニに居住していたと考えられる。

2. ランゴバルド人戦士の墓

これまでの発掘調査では，ゲルマン系の女性被葬者に伴う武器の出土は認められていない。ただし，例外は刀子であり，主にランゴバルド人，フランク族およびゲピド族の地位が高かった女性被葬者の副葬品として確認されている（Bona 1971：p. 66）。一方，ソゾラド墓地などの事例が示しているように，武器を伴わない男性の埋葬は確認されていない（Vida 2008：p. 82）。奴隷とみられる最下層の被葬者を除き，男性全員に武器が副葬されていたとみられるのである。これらの事実から，武器はゲルマン系の男性のみに伴う副葬品であると考えるこ

とができる。

民族移動時代には，移動に伴う多数の戦争や略奪などが行われ，当時の社会においては戦士がきわめて重要な存在であったと想定される。武器とともに埋葬されたゲルマン系の男性被葬者の全員が戦士であったとは言いがたいが，当時の社会における男性の理想像は戦士であったと考えられ，戦士ではなかった男性でも武器とともに埋葬された可能性がある。

ところで，戦士とみられる男性はどのような武器とともに埋葬されていたのであろうか。パンノニア期，スロヴェニア期およびイタリア期にみられる武器は，スパタ，サックス，鉄鏃，槍先，馬具，甲冑である。先に述べたように，ボナとヴィダは，文献資料と副葬品の組成を手がかりとしてランゴバルド人社会の階層を復元している（Bona 1971，Vida 2008）。そうした先行研究をふまえながら，現スロヴェニア地方ではどのような階層に属する人物が戦士としての役割を果たしていたのかについて，クラニ・ラユフ墓地の事例から探っておきたい。

戦士のものとみられる武器とともに埋葬されたランゴバルド人男性の墓は，6 号墓[7]，11/2 号墓[8]，52 号墓[9]，156 号墓[10]，177 号墓[11]，180 号墓[12]，319 号墓[13]，327 号墓[14]，331 号墓[15]，332 号墓[16]，335 号墓[17]，352 号墓[18]，595 号墓[19]，614 号墓[20]，628 号墓[21]，Pečnik 2 号墓[22]のあわせて 16 墓である（第 1 表）。また，ズデンコ・ヴィヌスキ（Zdenko Vinski）は，破壊された墓から出土したスパタ，長短のサックス，鉄鏃，槍，アンブーをランゴバルド人戦士のものとしている（Vinski 1980）。

これらの墓から出土した武器は，すべて 6 世紀におけるメロヴィングタイプの武器である。8 点が認められるスパタは，イタリア期およびパンノニア期におけるランゴバルド人やメロヴィング地方のゲピッド族のものとみられるスパタと同じタイプである。それらの少なくとも 2 点には象嵌が施され，6 号墓では鞘に銀と皮の跡が認められる。また，2 点のスパタには，四角錐型の鍔が確認されている。そうした鍔はイタリアのランゴバルド人によくみられるも

第 1 表　クラニ・ラユフ墓地から出土したランゴバルド人戦士の墓と副葬品の一覧

墓番号	剣（スパタ）	サックス・刀子	鉄鏃	アンブー（盾）	火口	ハサミ	毛抜き	農工具	四角型締め金具（ベルト）	卵円型締め金具（ベルト）	指輪・輪	一方的櫛	二面性櫛	首飾り	衡器	針	その他留め針（フィブラ）
6	○	○	○	○	○	○	○		○		○	○	○				
11/2	○	○					○	○		○							
52		○	○		○			○		○							
156		○	○		○			○		○	○						
177		○	○		○			○		○	○		○				
180		○	○		○	○		○	○	○	○						
319		○															
327		○			○					○		○	○				○
331		○			○					○						○	
332		○			○	○		○		○	○		○	○			
335		○			○					○							
352		○			○			○		○							
595		○				○									○		
614	○																
628	○								○								
Pečnik 2	○	○	○														

のであるが，パンノニア期にはほとんど出土しない。短いサックスは6世紀のタイプが多く，鉄鏃はスズメ型や三体型鉄鏃（両タイプとも，ランゴバルド人とゲピッド族によく伴う鉄鏃である）が数多く出土している。クラニ・ラユフ墓地では，槍先とアンブーはほとんど出土しないが，6号墓ではスパタとともに，槍先とアンブーの副葬が確認されている（Vinski 1980：p. 25）。

ヴィヌスキは，6号墓，11/2号墓，595号墓，628号墓およびスパタが出土している墓がランゴバルド人の戦士の墓であると指摘している（Vinski 1980：p. 25）。以下，先に挙げた16基のさらに詳しい内容を確認していこう。

6号墓（第3図）は，パンノニアで知られている貴族の戦士の墓と同様な状況を示している。多数の出土遺物の中には，アンブー（盾），スパタ（被葬者の右側に配置），サックス2点（被葬者の左側に配置），槍先，鉄鏃5点（被葬者の右側に配置），締め金具（ベルト），火口の出土が認められる。これらは，スゼントエノドレ遺跡とカユダッシュ遺跡にみられる貴族の墓と類似している。しかしながら，クラニ・ラユフ墓地では鉄鏃が出土していることから，ボナは，鉄鏃は半自由人の武器であり，貴族の副葬品ではないと指摘している（Bona 1971）。なお，現在残る6号墓の資料には甲冑が含まれていないが，多様な副葬品が出土しているため，甲冑も副葬されていた可能性がある。

11/2号墓は，石に覆われた墓である（Knific 1995：p. 36）。スパタ（被葬者の右側に配置），刀子（被葬者の左側に配置），締め金具（ベルト）が出土しており，被葬者は6号墓と同様に貴族であった可能性が高いが，6号墓の被葬者より地位が低かった可能性がある。

52号墓，156号墓，180号墓からは，鉄鏃，締め金具（ベルト），刀子，火口（180号墓以外）等が出土している。副葬品のアッセンブリッジはパンノニア期の半自由人と類似しており，これらの墓の被葬者は，弓を使用していた半自由人（ボナのaldiones）ではないかと考えられる。

177号墓からは，槍，火口，刀子，締め金具（ベルト），鉄鏃が出土している。ボナは，槍を使用していたのはもっとも地位が低かった貴族（farimanni）であると指摘している。たしかに，副葬品のアッセンブリッジは，パンノニア期のfarimanniと共通するものである。なお，595号墓からは，サックス2点のほか，鉄鏃，火口，衡器が出土しており，衡器以外の副葬品は177号墓と類似している。

319号墓，327号墓，331号墓，332号墓，335号墓および352号墓からは，締め金具（ベルト），火口，装身具など以外に多数のサックスが出土している。これらの墓がランゴバルド人戦士のものであるかどうかについては現時点で判断できないが，サックスの多数副葬は特徴的で，注目に値する。

614号墓および628号墓からはスパタ2点が出土している。スパタは貴族の戦士に限定されたものであった可能性が高いが，614号墓からは他の副葬品が一切確認されておらず，豊かな副葬品をもつ6号墓や11/2号墓の被葬者と比べると，だいぶ地位の低い被葬者が想定される。しかしながら，クラニ・ラユフ墓地のアッセンブリッジについては，副葬品の一部が行方不明となり，発掘当時の状況が正しく把握されていない可能性もある。さらに，ゲルマン系の墓には，貴重な金属や宝石で作られた器物が副葬されていたため，盗掘の被害に遭っているものが少なくない。これらを考え合わせると，614号墓と628号墓には他の武器が副葬されていた可能性もあり，両墓の被葬者の地位が単純に低かったとみることはできない。

Pečnik 2 号墓(第 5 図)からは，鉄鏃 23 点(被葬者の右側に配置)，同タイプのサックス 2 点(被葬者の頭の左右に配置)，スパタ（被葬者の右側に配置）が出土している。このアッセンブリッジは，武器セットとともに埋葬されたパンノニア期の貴族墓に似ているが，鉄鏃の副葬はパンノニア期の貴族墓にはみられない特徴である。それらの鉄鏃の中には，Pečnik 2 号墓にしか存在しないタイプもあり，特別に選ばれた鉄鏃であるとの指摘もある(Odar 2006：p. 273)。また，スパタはクラニ・ラユフ墓地で出土している多くの事例と変わりはないが，まったく同じ形態と長さをもつサックスは，被葬者のために特別に作られたものであると考えられる。さらに，武器とともに埋葬された多くの男性とは異なり，Pečnik 2 号墓では武器以外の副葬品（締め金具など）が出土していない。これらの点からみると，Pečnik 2 号墓の被葬者は特別な存在であると考えられるが，同様な状況を示す他のゲルマン系の墓はまだ確認されていない。

以上に紹介した 16 基の被葬者は，ランゴバルド人の戦士である可能性が高い。しかしながら，ボナが示したようなパンノニア期の戦士と，その性格がただちに対応するわけではない。クラニ・ラユフ墓地にみられる副葬品アッセンブリッジの差異は，ランゴバルド人の社会階層を反映している可能性がある。しかし，少なくともパンノニア期と同じような細かな階層分類は現時点では困難であり，ボナの分類による伯爵（dux)，地位が高い貴族（adalingi)，地位が低い貴族（arimani）は，クラニ・ラユフ墓地では一つの階層（貴族）としてとらえておくのが妥当である。その一方で，パンノニア期と同様に，ここでも半自由人および奴隷の存在を認めることは可能である。

Ⅶ. まとめ

本稿では，現スロヴェニア地方におけるゲルマン系の埋葬遺跡および武器の問題を取りあげた。当時においてもっとも重要な墓地および要塞とみられているクラニ遺跡を紹介し，墓地に埋葬されていたランゴバルド人の副葬品について若干の考察を加えた。

クラニ・ラユフ墓地における詳細な変遷の過程はいまだ不明であり，アンドレイ・ヴァリッチ（Andrej Valič）による試みはあるものの（Valič 1991：pp. 33-35)，当時の社会関係や階層構造は十分に把握されていない。墓地における詳細な変遷の過程が明らかになれば，世代ごとの墓域構成が復元され，家族関係などにも迫れるようになると考えられる（Lux and Ravnik 2008：pp. 43-69)。しかしそこには，墓のアッセンブリッジの多くが復元的に再構成されたものであるため，実際のアッセンブリッジではない可能性が高いという資料上の問題点が存在する（Stare 1980：pp. 7-8)。

こうした研究の現状において，現スロヴェニア地方におけるゲルマン系遺物の出土数はけっして多いとは言えないものの，本稿で述べてきたように，それらに伴ういくつかの特徴は指摘することができる。

第一点目は，墓地を構成する諸要素からみると，ゲルマン系の部族および先住ローマ人が居住していたことは確からしいということである。そこには多様な民族（ランゴバルド人，アラマン族，フランク族など）の構成が想定され，例えば，クラニ・ラユフ墓地では，地点を異にしながらゲルマン系および先住ローマ人の埋葬が認められるとともに，先住ローマ人のものと判断される墓からはゲルマン系の特徴をもつ副葬品も出土している。また，東ゴー

ト族の墓地として知られているドラヴリェ墓地では，多様なゲルマン系部族の被葬者が想定され，例えば，東ゴート族の墓には基本的に武器の副葬は認められないが，ドラヴリェ19号墓からはサックスが出土している。同墓から出土した他の副葬品は東ゴート族のものと変わりはないが，頭骨に変形が認められる点も考慮すると，その被葬者はアラマン族であった可能性が考えられる。

第二点目は，クラニ・ラユフ墓地における副葬品の構成や配置にみられる特徴である。現スロヴェニア地方に位置する同墓地では，スパタは被葬者の右側に置かれ，スパタの代わりにサックスが副葬された事例も存在する。スパタは当時の主要な副葬品として被葬者の高い地位を示すものとみられ，ボナは，スパタがパンノニア期におけるランゴバルド人貴族の存在を示すものと理解している（Bona 1971）。ただし，ボナの指摘にあるように，ランゴバルド人の中でもっとも地位が高いとみられる貴族は甲冑を副葬しているが，現スロヴェニア地方で武器セットを伴う事例は，クラニ・ラユフ墓地6号墓にしか認められない。もっとも，パンノニア期のあり方とは異なり，同墓からは下位層の墓に伴う鉄鏃が出土している。

本稿で主に取りあげたクラニ・ラユフ墓地は，現スロヴェニア地方における当時最大の墓地である。また，カルニウム要塞を支配していたランゴバルド人は支配層および戦士層であり，カルニウムはイタリアへの道を守っていたもっとも重要な要塞であったと考えられる。しかしながら，発表されている情報がきわめて限られているため，現時点では確かな結論を出すのが困難である。

今後は，クラニ・ラユフ墓地をはじめとして，現スロヴェニア地方における民族移動時代の遺跡および墓地の発掘調査事例を増やすとともに，すでに発掘されている資料の速やかな公表が望まれる。近年では，スラヴコ・ツィグレネチュキ（Slavko Ciglenečki）による集落パターンの研究も進んでいるが（Ciglenečki 1992 等），墓地およびゲルマン系の武器に関する分析は，今後の大きな研究課題であると言えよう。

謝辞

本稿はJSPS科学研究費補助金（15J01238）の助成を受けた研究成果の一部である。

註

1）「世界・文化の境界領域」は Štih, P., V. Simoniti, 2009, *Na stičišču svetov-Slovenska zgodovina od prazgodovinskih kultur do konca 18. stoletja.* Ljubljana, Modrijan. の本のタイトルである。

2）リュブリャーナ市から北西に30km離れた現クラニ市はほぼ全てが遺跡となり，中世時代までにカリニウム（ラテン語）と呼ばれていた。このクラニ遺跡には墓地が二つあり，クラニ・ラユフ墓地（主にゲルマン系）およびクラニ・クリジシュチェ・イスクラ（Kranj - križišče Iskra，主に先住ローマ人），カリニウムと呼ばれる要塞もある。本稿では，主にゲルマン系が埋葬されたクラニ・ラユフ墓地を中心に紹介する。

3）インターネット情報；スロヴェニアの日刊新聞 Primorske Novice の電子版（2011年11月11日），日刊新聞 Delo の電子版（2011年11月12日）およびスロヴェニア放送協会 RTV の電子版（2011年11月16日）に発表されたニュースである。

4）ソゾラド遺跡は，現ハンガリーショモジ県（Somogy megye）ソゾラド村に位置する。ショモジ県はハン

ガリー南西部に位置し，南の県境はクロアティア国境，北の県境はバラトン湖である。

5) カユダッシュ遺跡は，現ハンガリートルナ県（Tolna megye）カユダッシュ村に位置する。トルナ県はドナウ川西岸に位置し，ショモジ県（Somogy megye），フェイェール県（Fejér megye），バーチ・キシュクン県（Bács-Kiskun megye），バラニャ県（Baranya megye）と接する。

6) セントエンドレ遺跡は，現ハンガリーペシュト県（Pest megye）セントエンドレ市に位置する。セントエンドレ市はドナウ川沿いで，首都のブダペストに近い。

7) Stare 1980：T. 2-7 を参照。

8) Stare 1980：T. 7-8 を参照。

9) Stare 1980：T. 23-24 を参照。

10) Stare 1980：T. 51-52 を参照。

11) Stare 1980：T. 58-59 を参照。

12) Stare 1980：T. 59- 61 を参照。

13) Stare 1980：T. 92 を参照。

14) Stare 1980：T. 95 を参照。

15) Stare 1980：T. 97 を参照。

16) Stare 1980：T. 97-99 を参照。

17) Stare 1980：T. 100-101 を参照。

18) Stare 1980：T. 107. を参照。

19) Stare 1980：T. 126-127 を参照。

20) Stare 1980：T. 129 を参照

21) Stare 1980：T. 130 を参照。

22) Odar 2006：p. 274-275，T1-2 を参照。Pečnik 2 号墓の副葬品は，1980 年（Stare 1980）に墓とは関係しない遺物として報告された。その後，墓のアセンブリッジとして復元され（Odar 2006），当時の発掘者の名前と連番を付した墓名が与えられた。

参考文献

Bona, I. 1971 Langobarden in Ungarn. *Arheološki vestnik 21-22*, pp. 45-74.

Cigleneški, S. 1992 *Pólis Norikón: poznoantične višinske utrdbe med Celjem in Brežicami*. Podsreda, Zavod Spominski park Trebče.

Giese, W. 2004 *Die Goten*. Stuttgart, Verlag W. Kohlhammer.

Knific, T. 1995 Vojščaki iz mesta Karnija. *Kranjski zbornik* 1995, pp. 23-40.

Knific, T. 2005 Gospe iz mesta Karnija. *Kranjski zbornik* 2005, pp. 331-343.

Lotter, F., Bratož, R. and H. Castritius 2005 *Premiki ljudstev na območju Vzhodnih Alp in Srednjega Podonavja med antiko in srednjim vekom (375-600)*. Ljubljana, Sophia.

Lux, J. and J. Ravnik 2008 Poskus rekonstrukcije obsega poznoantičnega grobišča Lajh v Kranju. *Varstvo spomenikov* 44, pp. 43-69.

Menghin, W. 1985 *Die Langobarden: Archaeologie und Geschichte*. Stuttgart, K. Theiss.

Odar, B. 2006 The archer from Carnium. *Arheološki vestnik* 56, pp. 243-275.

Pleterski, A. 1999 Karnij postane Kranj. In D. Božič, R. Bratož, S. Ciglenečki, J. Dular, J. Horvat, T. Knific, P., A. Pleterski, M. Šašel Kos, I. Turk and A. Velušček (eds.), *Zakladi tisočletji, Zgodovina Slovenije od neandertalcev do Slovanov*. Ljubljana, Modrijan, pp. 347-348.

Priester, K. 2004 *Die Geschichte der Langobarden: Gesellschaft-Kultur–Alltagsleben*. Thesis Konrad.

Sannazaro, M. 2006 Elementi di Abbigliamento e Ornamentali "Barbarici" da Alcune Sepolture della Necropoli Tardoantica di Sacca di Goito (MN). In M. Buora (ed.), *Goti nell' arco Alpino, Orientale Archaeologia di Frontiera 5*. Udine, Societa Friulana di Archaeologia, pp. 59-80.

Slabe, M. 1975 *Dravlje. Grobišče iz preseljevanja ljudstev*. Situlà 16. Ljubljana, Narodni muzej.

Stare, V. 1980 *Kranj. Nekropola iz časa preseljevanja ljudstev*. Katalogi in monografije 18. Ljubljana, Narodni muzej Ljubljana.

Šmit, Ž. 2006 *Jordanes – O izvoru in dejanjih Gotov, Getika*. Ljubljana, ZRC SAZU.

Štih, P. and V. Simoniti 2009 *Na stičišču svetov-Slovenska zgodovina od prazgodovinskih kultur do konca 18. stoletja*. Ljubljana, Modrijan.

Valič, A. 1991 Osmerokotna stavba pri farni cerkvi v Kranju. In T. Knific and M. Sagadin (eds.), *Pismo brez pisave. Arheologija o prvih stoletjih krščanstva na Slovenskem*. Ljubljana, Narodni muzej, pp. 33-35.

Vinski, Z. 1980 Ovrednotenje grobnih pridatkov. In V. Stare (ed.), *Kranj. Nekropola iz časa preseljevanja ljudstev. Katalogi in monografije 18*. Ljubljana, Narodni muzej, pp. 17-32.

Vinski, Z. 1982 Šljem epohe seobe naroda nađen u Sinju. In J. Lučić, B. Boban, M. Gross, M. Maticka, I. Očak, T. Raukar and P. Strčič (eds.), *Starohrvatska prosvjeta, ser. 3, sv. 12*, Split, pp. 7-34.

Vida, T. 2008 Die Langobarden in Pannonien. In E. W. Wagner (ed.), *Die Langobarden. Das Ende der Völkerwanderung. Katalog zur Ausstellung im Rheinischen Landesmuseum, Bonn 22. 08. 2008 - 11. 01. 2009*. Darmstadt, Landschaftsverband Rheinland, Primus, Bonn, Rheinisches Landes Museum, pp. 73-89.

Werner, J. 1962 *Die Langobarden in Pannonien. Beiträge zur Kenntnis der langobardische Bodenfunde vor 568*. Bayerische Akademie der Wissenschaften. München, Bayerische Akademie der Wissenschaften, in Kommission bei C. H. Beck.

図表出典

第1図　1：Vinski 1980　2：Vinski 1982　3：Stare 1980　4：Sannazaro 2006　5：Vinski 1980（1・2・3・5は原図を一部改変，4は原図をトレース）。

第2図　筆者作成。

第3図　Stare 1980を一部改変。

第4図　Slabe 1975を一部改変。

第5図　Odar 2006を一部改変。

第6図　Bona 1971を一部改変。

第1表　筆者作成。

Grave Goods of the German Warriors of the 5th and 6th Centuries from Kranj-Lajh Cemetery in Slovenia

BLAJHRIBAR KUBO, Petra

From Prehistoric times until the present, important trade and traffic routes crossed present day Slovenian territory. Its roads played an important role during the Migration period, as they were important in controlling the routes into Italy. Like the Romans before them, different Germanic tribes occupied the most strategically important roads in the region. However, very few Germanic related finds have been found in present day Slovenia. This paper discusses the relationship between the Germanic tribes society and grave goods (mainly combative finds) found in the graves of warriors. Specifically, this paper outlines the history of the Germanic peoples in Slovenia, based on previous archaeological work, done on Pannonian Lombards by Istvan Bona, with reference to the largest cemetery of that time, Kranj-Lajh, and its fortress Carnium.

Analysis indicates, uniformity in the setting of the weapons in the graves, which could suggest there were specific rules or customs for the placement of grave goods. Among other things, spatha represent the dominant weapon, and was generally placed on the right side of the deceased. It appears that when there was no spatha, the sax assumed its role. The Dravlje warrior in grave 19 had a sax under his left forearm, which resembles the graves in Szentendre and Vörs-Kajdacs, where there is a concentration of weapons on the left side of the deceased. However, the weapons in the graves in Kranj, Bilje and Solkan were placed on the right side of the deceased. In other words, these three cemeteries indicate, that the burial of the Lombards during the Slovenian phase, did not differ much from the burials in the Italian phase. After the 7th century the Lombards accepted Christianity, resulting in fewer grave goods. However, it appears that the habit of placing weapons in the graves of those, who seemed to be warriors, continued even after the acceptance of Christianity.

This paper focused mainly on the cemetery in Kranj, the largest known Migration Period cemetery in Europe. Eastern Goths, and later the Lombards, represented the dominant warrior class, and they held the Carnium fortress, which controlled the route into Italy. However, the published literature is limited and it is difficult to reach a reliable conclusion at the present time.

There is a need for further excavations to take place as well as publication and analysis of previously excavated material. Cemetery patterns, grave goods and mainly Germanic combative finds analysis are prospective areas of future research.